

# 岡崎城跡 月見櫓 発掘調査中!!

2017

8/14 /月/

9/22 /金/

- ※調査は平日のみ。
- ※雨天中止
- ※調査の進捗状況により調査期間の変更があります。



明治5年（1872）頃の月見櫓

2017

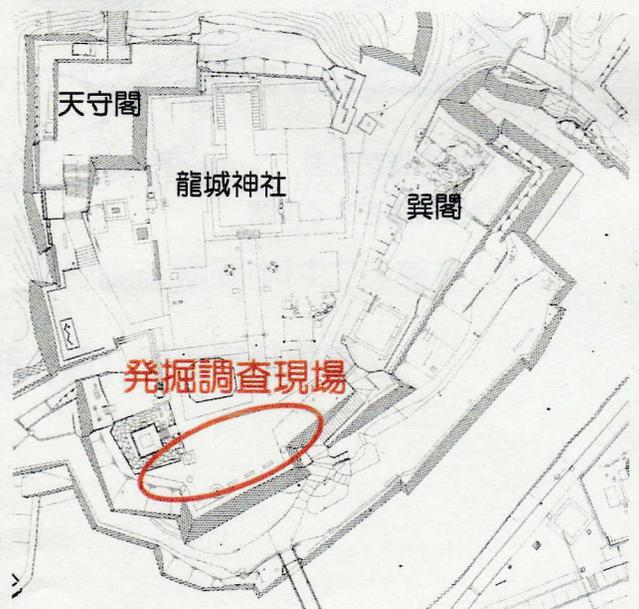
200西

9/2 /土/ 11:00 / 13:00

現場公開 10:00～14:00

※申し込み不要、直接現地へ

※荒天中止

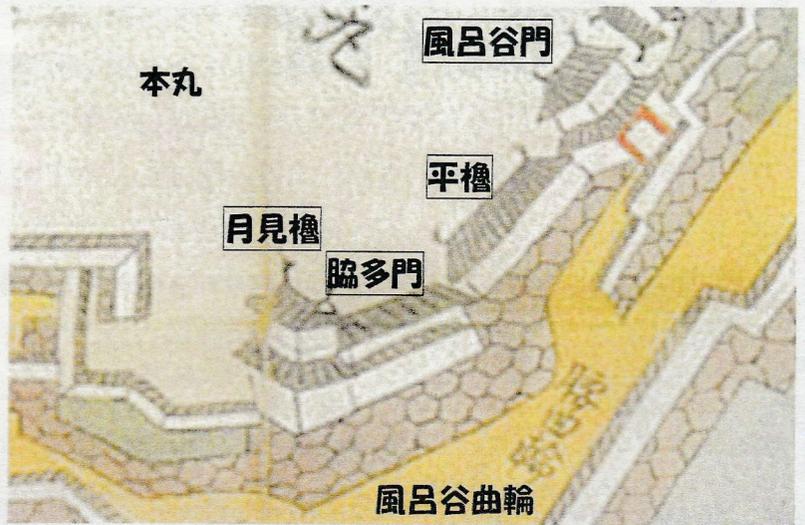


岡崎市教育委員会 社会教育課 文化財係

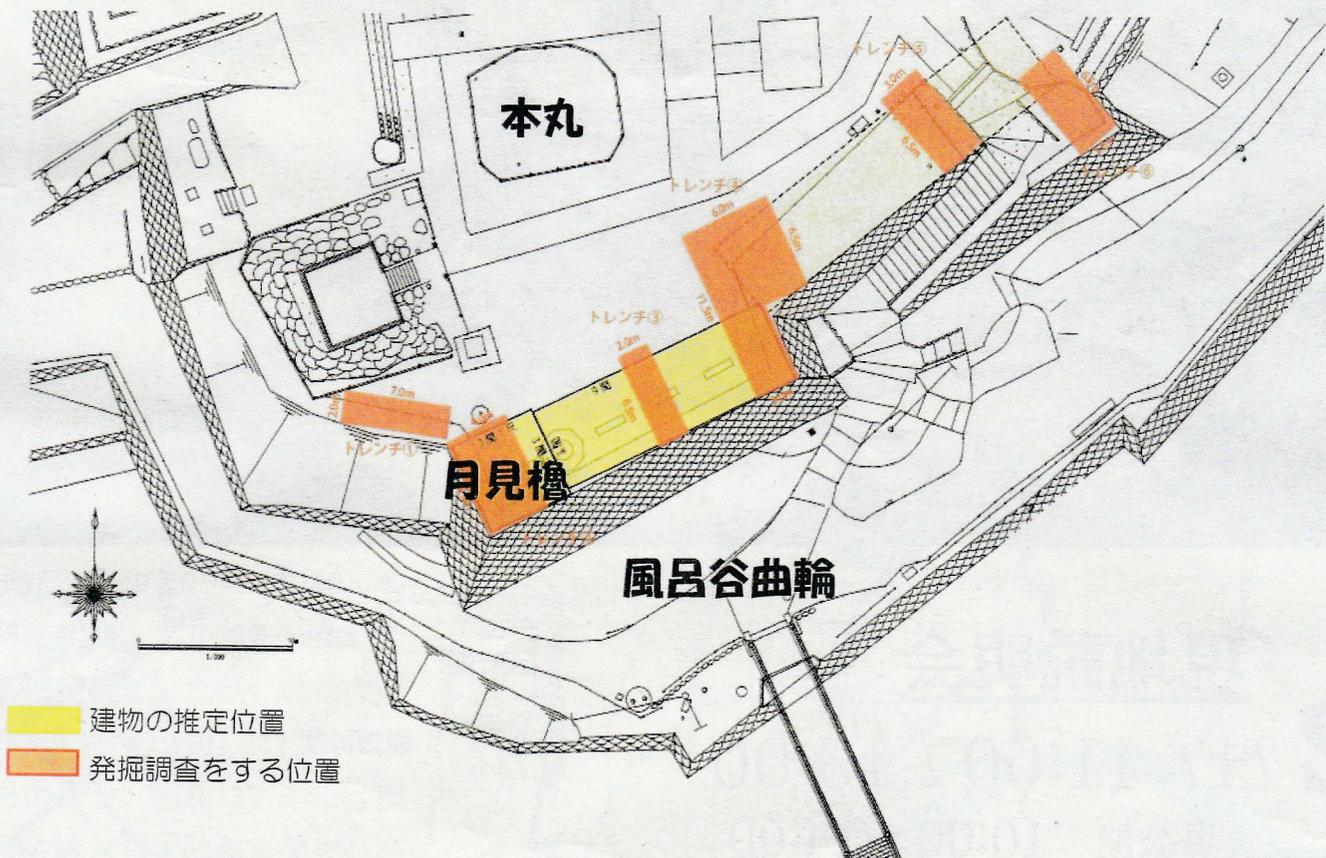
Tel 0564-23-6177

## ★調査の経緯

岡崎市では平成 29 年 3 月に「岡崎城跡整備基本計画」を改定したことを受け、整備を進めていきます。その第一歩として、まだまだ不明確なところの多い岡崎城の城郭遺構について積極的に調査研究していくこととなりました。



江戸時代後期の絵図に見る月見櫓周辺  
(下の図と照らし合わせてご覧ください)



建物想定位置（黄色部分）と発掘調査箇所（赤色部分）

## ★月見櫓発掘の目的

月見櫓は古写真に写るように、明治初年まで存在していたことが確認できます。この月見櫓の建物基礎部分の残存状況の確認を目的に発掘調査を実施します。合わせて月見櫓から続く脇多門櫓や風呂谷門の残存状況についても確認します。

## ★月見櫓とは

名前のとおり、「お月見」をする建物のことであり、絵図で「月見櫓」と表記されることもあります。実際にこの櫓でお月見をしたかはわかりませ



松下鳩臺の描いた月見櫓（江戸時代後期）

んが、月見櫓から南側は遮るものがなく、お月見には絶好の位置にあたります。

一方で眼下には風呂谷曲輪の狭い通路を見下ろし、矢を射掛ける絶好のポイントでもあり、防衛上も重要な櫓であったと考えられます。

## ★発掘調査の公開

発掘調査状況を随時公開しています。フェンスの外から発掘調査状況をご覧ください。危険ですので、フェンスの中には入らないようにお願いいたします。

（中に入れるのは現地説明会時のみとなります。）発掘調査期間中はご迷惑をおかけしますが、調査への御理解と御協力のほどお願いいたします。

# 岡崎城の歴史

明大寺を拠点としていた西郷氏が、西郷頼嗣の代に北方からの松平氏の進出をにらみ、享徳元年（1452）から康正元年（1455）にかけて明大寺地区から乙川を挟んだ龍頭山に砦を築き、北方の備えとしたのが岡崎城の始まりとされます。その後、明大寺を制圧した松平清康が享禄3年（1530）頃に岡崎城に本拠を移し、松平広忠、徳川家康へと継承され城郭整備が図られました。天正18年（1590）に豊臣系大名の田中吉政の居城となって以降、織豊系城郭に改修されていきます。

岡崎城本丸北側に「清海堀」と呼ばれる深さ10m、幅20m程の空堀がありますが、これは西郷頼嗣の入道後の号「清海」に由来するとされ、後世の拡張を想定しつつも中世城郭の様相を示す遺構とされるが、詳細は不明です。水野家岡崎藩主時代（1645年以降）成立の『岡崎領主古記』には「権現様の御縄張」が行われたことが記され、家康の岡崎城拡張・整備を伝えますが、同時代の遺構を発掘調査からは見いだせていません。

天正18年（1590）に徳川家康が関東移封された後に、豊臣系大名の田中吉政が入城すると、天守台石垣を築き天守を造営し、岡崎城を織豊系城郭化していきます。また、田中氏開削とされる総堀は「田中堀」とも称され、総堀内に東海道を移転するなど城下町の本格的な整備も始まります。

慶長6年（1601）に譜代大名の本多康重が入城し、以後3代続く（前本多家）。元和3年（1617）に三重天守閣を再建し、慶長18年と元和9年の将軍上洛の際の宿泊のために二の丸に御殿をそれぞれ建てた他、3代藩主忠利の時に菅生川端石垣が構築されました。

正保2年（1645）に水野忠善が入城すると、本多氏の城郭・城下町経営を受け継ぎ、総曲輪内における土庶混住を整理し、侍屋敷の拡張を行い、総曲輪の出入り口を整備することで城下町の最終的な整備が行われました。これにより、17世紀中頃には投町から松葉町に至る菅生郷の全域が城下町として編成されました。

宝暦12年（1762）に松平康福が入城するが、7年後の明和6年（1769）には本多忠肅が城主となるが（後本多家）、この頃はいつづ災害から藩財政が逼迫し、藩政改革に迫られ、岡崎城郭整備に関する記録は僅かです。

明治維新後の明治6年（1873）の廃城令後、城郭内の建物は取り壊されました。また、昭和20年（1945）の岡崎空襲により岡崎公園一帯も被災しましたが、戦後の昭和34年（1959）には天守閣を復興し、昭和37年には岡崎城跡として岡崎公園部分が岡崎市の史跡に指定されて現在に至ります。



岡崎城郭図

# 岡崎城跡月見櫓発掘調査 現地説明会 (H29.9.2)

岡崎市教育委員会

**[発掘調査]**：平成 29 年 8 月 14 日～平成 29 年 9 月 22 日 (予定)

**[調査経緯]**：岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画 - 平成 28 年度改訂版 -」(H29.3)に基づき、今後岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めている。この調査研究の一環として、今回月見櫓およびその周辺の発掘調査を実施している。

## **[櫓と月見櫓]**

- ・櫓 (やぐら)：平時は物見のためや武器庫として使用し、戦時には攻撃や守りの要の施設として使用。
- ・櫓の種類：建物の階層や形状、立地、用途などから様々な種類がある。  
例) 三重櫓、二重櫓、平櫓、隅櫓、多門櫓、太鼓櫓、月見櫓、富士見櫓、井戸櫓
- ・月見櫓：「月見」をする目的の建物であり、他の櫓とは役割が異なる。そのため、他の櫓に比べ上階の開口部が大きく、開放的な構造となる。

## **[岡崎城の月見櫓]**

- ・岡崎城の月見櫓は古写真に写るが、明治 6 年 (1873) の廃城令により天守等とともに解体された。
- ・古写真に写る月見櫓の建築年は不明。ただし、前本多家城主時代 (1601～45 年) の絵図にも現在地に 2 階建ての建物が描かれており、この頃に初めて月見櫓 (二重櫓) が建てられた可能性が高い。
- ・天守のある本丸に立地し、月見櫓から東側に脇多門櫓、平櫓、風呂谷門と建物が連続する。
- ・南方を遮る建物がなく月見にはよい立地であるとともに、眼下には「風呂谷曲輪」の狭い通路を見下ろす立地にあたることから戦時には防衛の拠点にもなる。

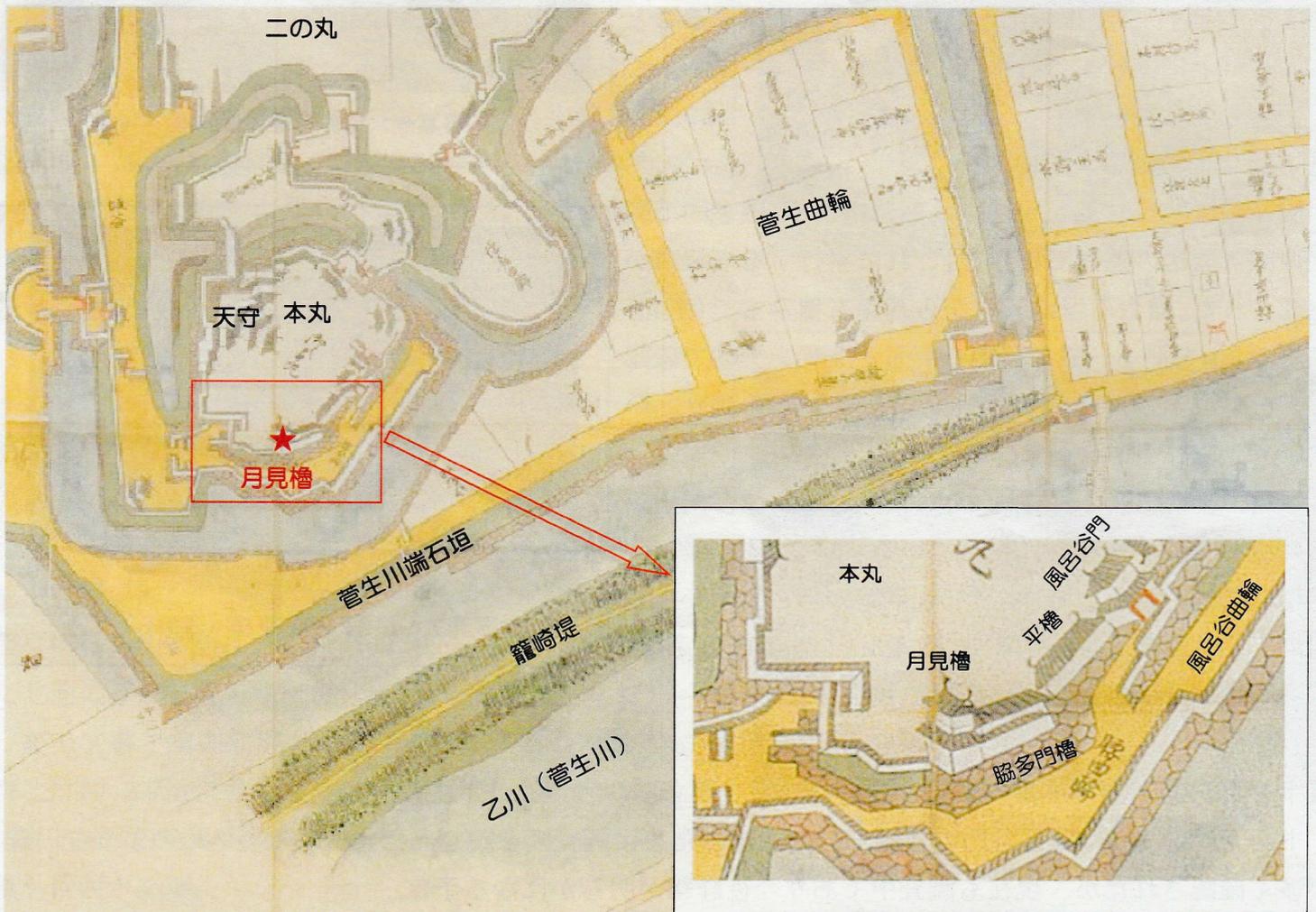


図 1 岡崎城絵図における月見櫓及びその周辺

## [絵図等にみる月見櫓]

### ●前本多家時代（江戸時代前半）

建物配置を描いた絵図によれば、2階建ての建物と脇多門櫓が描かれる。2階建ての建物が月見櫓であれば江戸時代の初めには存在していた事になる。ただし、古写真の月見櫓が江戸時代初めからずっと建っていたものとは考えがたい。

### ●水野家～後本多家時代（江戸時代前半～末）

水野家時代には二重櫓が描かれており、月見櫓である可能性が高い。後本多家時代の絵図（1781年写し）に「月見櫓」と明記されるものがあり、江戸時代後期には月見櫓として確実に存在したといえる。また、脇多門櫓（二重櫓）、平櫓、風呂谷門も描かれており、詳細がよくわかる。

### ●描かれた月見櫓

江戸時代後期の岡崎藩士・松下鳩台（1771～1849）により月見櫓が描かれている。月見櫓は重箱櫓（総二階造り・1階と2階の平面が同規模）であること、屋根の両端には鯨（しゃちほこ）が載ること、2階には高欄が表現され月見の場であったこと、1階には窓や防御用の狭間があったことなどが分かる。

脇多門櫓も二階造りで、同様に鯨を載せるが月見櫓のような開放的な空間はなく、壁に四角い窓（狭間）が描かれるのみで、防御施設としての櫓である。月見櫓西側に延びる塀は曲輪の地形に合わせて折れながら延び、壁には狭間が切られている。

## [古写真にみる月見櫓]

廃城令により解体される前の姿を写した古写真（明治5年頃）からは、重箱櫓で2階の南半が板戸で開放されていることや、高欄が廻ること、1階は格子窓や狭間があることなどがよくわかる。

松下鳩台の描いた月見櫓（図4）と特徴がよく似ることから、古写真に写る月見櫓は少なくとも江戸時代後期には建てられていた可能性が高い。

その他、月見櫓西側（写真左側）には塀がなく、月見櫓東側（写真奥）には脇多門櫓もないことから、それぞれ月見櫓とは解体時期が異なる可能性が高く、江戸時代末期に既になかった可能性もある。

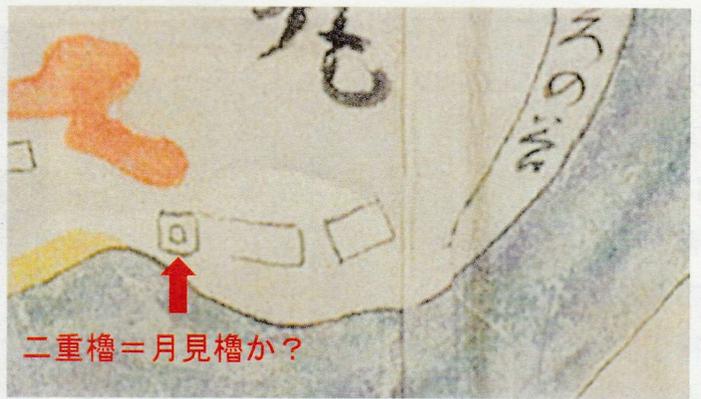


図2 前本多家時代

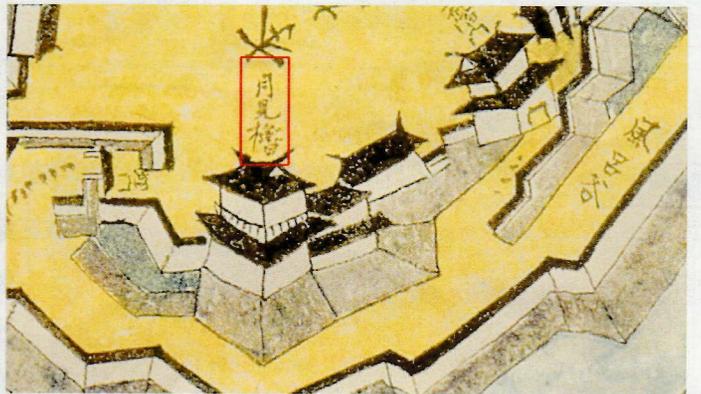


図3 後本多家時代（1781年写し）



図4 松下鳩台の描いた月見櫓（後本多家時代・江戸時代後期）

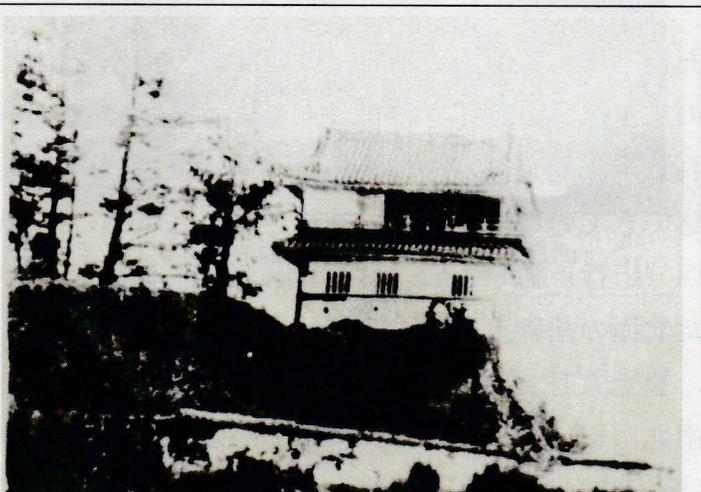


写真1 明治5年（1872）頃の月見櫓の西面

## 【月見櫓・脇多門櫓の規模】

明和7年（1770）の「書上文書」（城主が松平から本多に交代した際の引き継ぎ書）に城内の建物の規模が書かれている。これに月見櫓と脇多門櫓の規模も明記されている（平櫓と風呂谷門は未記載）。

### 月見櫓

桁行3間1尺（約5.7m）  
梁行3間2尺（約6.0m）

### 脇多門櫓

桁行9間（約16.2m）  
梁行3間（約5.4m）

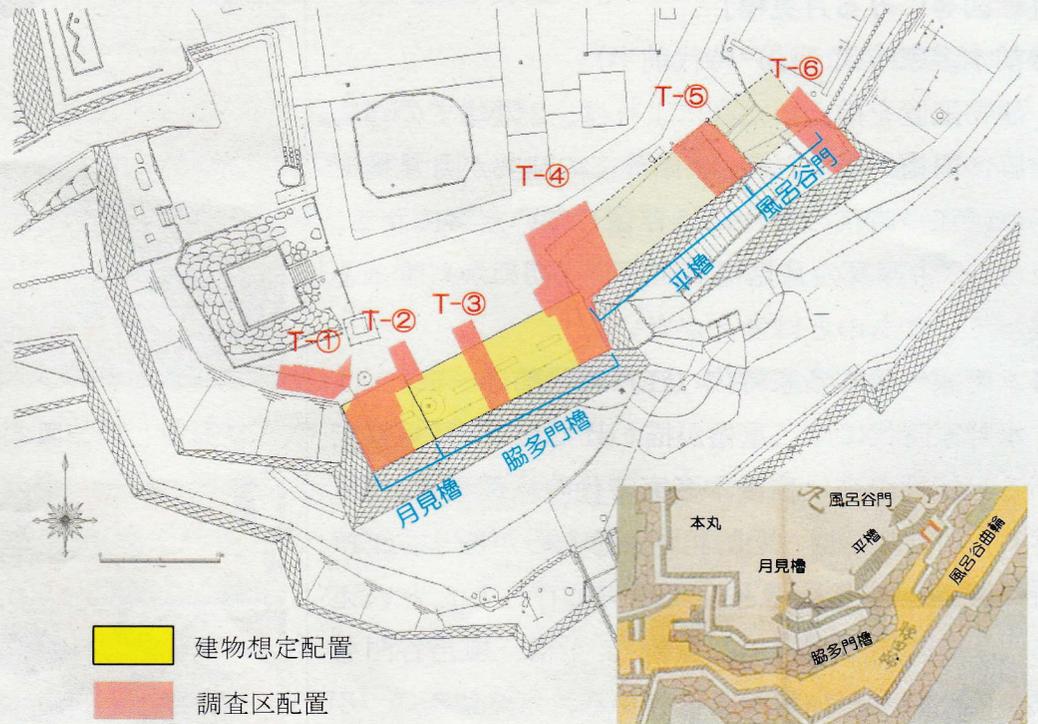


図5 調査区（トレンチ：T）配置図

## 【発掘調査の状況】

### 【トレンチ①（塀）】

月見櫓の西側に位置し、絵図では月見櫓から延びる塀（土塀もしくは築地塀）が描かれている。

発掘調査では塀の基礎となる石列を確認することを目的としたが、石列は確認されず塀の形式（土塀もしくは築地塀）について明らかにすることができなかった。

調査区の東端部で月見櫓の北面の基礎石積みと思われる石列が確認された。

### 【トレンチ②（月見櫓）】

月見櫓の平面積の約2/3を調査した。櫓の南・西面にあたる櫓台石垣の天端石材に建物の土台木を載せるための加工痕跡が確認された。東面では基礎石積みが確認されたが、調査区外へ延びるため、北面に折れる地点は確認できていない。調査で確認された月見櫓の規模は、東西（桁行）約6.2m、南北（梁行）（トレンチ①で確認した北面の基礎石積みで計測）8.7mを測る。

書上文書と調査数値を比較すると、東西は約0.5m、南北は約2.7m大きくなり齟齬が生じる。建物の増改築による拡張なども可能性として考えられることから、今後も検討が必要。



写真2 トレンチ①全景（東から）



写真3 櫓台石垣の加工痕跡（東から）

※土台木を載せるために石垣を平滑に加工している



写真4 月見櫓全景（東から）



写真5 月見櫓・脇多門櫓接続部（北東から）

### 【トレンチ③（脇多門櫓）】

脇多門櫓の中央部よりやや西側にあたる。建物北面の基礎石積みと石組溝を確認した。基礎石積みは2段積みで、高さ約45cmを測る。櫓台石垣の天端から基礎石積みまでは約5.1mを測り、書上文書の3間（5.4m）よりやや小さい。

石組溝は排水用と考えられ、底面には小礫が敷き詰められている。基礎石積みから石組溝の中心までの距離は約1.0mを測り、屋根の雨落ち溝としては近接することから、軒下に位置する排水溝と考えられる。

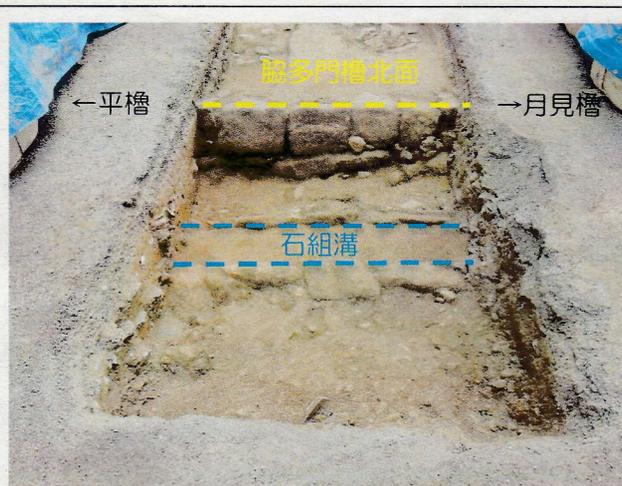


写真6 脇多門櫓（北から）

### 【トレンチ④（脇多門櫓・平櫓）】

脇多門櫓北東端部と平櫓西端部にあたる。脇多門櫓の北西隅部周辺の基礎石積みと、これに平行する石組溝が確認された。櫓台石垣の天端から基礎石積みまで（南北）は約5.3mを測る。脇多門櫓の東面とトレンチ②で確認した月見櫓との接点まで（東西）は16.2mを測り、いずれも書上文書の数値とほぼ一致する。

平櫓は基礎石積みは確認できていないが、脇多門櫓からの石組溝が平櫓沿いに折れている状況が確認された。平櫓の規模の特定はできないが、平櫓の櫓台石垣から石組溝までの距離（南北規模）が約4.5mを測ることから、脇多門櫓より一回り小さい規模が想定される。



写真7 脇多門櫓・平櫓（西から）

### 【トレンチ⑤・⑥（平櫓・風呂谷門）】

トレンチ⑤・⑥は風呂谷門の基礎部分の確認のために調査区を設定した。石垣の裏込めのような円礫が多く確認されたが、現在も調査中であり今後詳細が明らかになる予定。

※現地説明会資料は現時点の見解であり、今後の調査により変更となる可能性があります。